

## 子供から多様な考えをどのように導き出すか

水戸教育事務所学校教育課長 鈴木 宏一

アメリカの法教育の資料に次のような話があります。子ぐまのローランドが森で遊んでいる時にたくさんの蜂蜜を見つけました。ローランドはその蜂蜜をどうするか悩んでいると、母親ぐまは「社会で大切なものはみんなで分けるべきだ」と話しました。母親ぐまは分け方まで言及することはしませんでした。するとローランドは「見つけたのは僕だから、僕が一番もらってよいのでは」と。資料を読んだ子供たちは、ローランドは子ぐまなのだから、蜂蜜を多くもらわなくてもいいのではないかという考えの子。大人、子供に関わらず蜂蜜を欲しいという者に同じく分けた方がいいという考えの子。欲しい人、欲しくない人に関わらず、全て等しく分けたほうがよいという考えの子などなど。もちろん、考えを述べさせる時には子供にはその理由をきちんと聞くことは大切です。子供に求める考えには「社会がよりよく成り立つため」というのが前提にあります。この話は、配分的問題、配分的正義問題として興味のある話であると評価を受けた話です。

また、小学2年生の国語の教科書に掲載されているレオ・レオニ作の「スイミー」。スイミーを中心とした小魚たちが協力して、大きな魚を退治する話。日本の子供たちは「スイミーは協力して大きな魚を退治してすごい」「協力することはよいことだ」など、教科書を素直に読み取ることが多いと思います。しかし、読解力で世界の上位にあるフィンランドの子供たちは「スイミーは優秀なリーダーだったのか？」と批判的思考を生かして（クリティカル・シンキングで）読み取っていく場面も（小さな魚たちが大きな魚に向かうわけですからリスクも大きいわけです）。教科書に表現されていないことも読み取れる力を付けているフィンランドの教師。

新学習指導要領が全面実施になりました。学習指導要領が改訂されても、子供たちの多様な考えを導き出したり、子供たちの多様な考えを生かしたりすることは不易なことだと思います。○か×か、正か誤か、白と黒と判断することにとらわれることはなかったでしょうか。少数の子供たちの考えや意見を疎かにしてしまったことはなかったでしょうか。

授業だけでなく、学校の教育活動の中で子供の多様な考えを教師が導き出すこと、その考えを生かすことは、いつの時代も変わることはないと思います。自分の考えが生かされることを感じた子供が自己有用感を得ることにもつながり、ひいては広く社会に目を向けることにもつながればいいと思います。

## 春夏冬話「あきない話」コーナー

### 本気で一緒に 遊んだ一年間



水郡線玉川駅近くの水田風景  
(撮影 by S・K)

10年ぐらい前に、ある家電量販店で最後に担任をした教え子に会った。大学を卒業し、その家電量販店に就職し、トップクラスの営業成績を出しているとのことだった。

その時会った教え子の挨拶が「先生のおかげで無事社会人になれました。」だった。少し大げさな挨拶かと思うが、それには少々理由がある。その子供たちを担当したのは、彼らが小学校6年生の時である。とても元気な子が多く、5年生の時は学級経営が思うようにいかない状態で、いわゆる学級崩壊であった。

そんな子供たちを担当することになった時は、やや不安もあったが、「みんなが楽しく過ごせる学級づくり」をテーマに学級経営に取り組んだ。結果的にはその学年は大きな問題もなく卒業を迎えることができた。多分、子供たちにも「このままではいけない」という言葉にはできない危機感が心の中にあり、心ひとつにして頑張れた結果だと思う。そして、その時期の経験が、社会に出て活躍できる大人に成長させるエネルギーの一部になったのだろう。

私が教師として取り組んできたこともあながち間違いではなかったと確信が持てた出来事でもある。正に教育とは息の長い仕事である。(by I・H)